君を大好きだ

CONTENTS

第 1 話　約束 …… 3
（初出　2019.1　pixiv）

第 2 話　理由 …… 11
（初出　2018.12　pixiv）

第 3 話　境界線 …… 19
（初出　2018.12　pixiv）

第 4 話　悪戯 …… 25
（書き下ろし　2019.2 制作）

第 5 話　いつもそばで …… 33
（初出　2019.1　pixiv）

第 6 話　タイムトラベル …… 45
（初出　2019.2　pixiv）

あとがき …… 64

◎この本は個人的に作られた非公式ファンブックです。
◎原作者様・出版社様とは一切関係ありません。
◎オリジナルキャラ、死ネタ表現が一部ありますのでご注意ください。

第1話　約束

その日、軀のところへ大統領府からきた通信内容はいつもと違う緊迫感があった。
「異次元砲？霊界の奴らは大掛かりなことが好きだな」
『そんなわけでのぅ、お前さんところにいる飛影を人間界にやってくれんか？』
「大統領命令だろ？こっちに拒否権はねぇよ。すぐ飛影を向かわせる。人間界にいるオレ配下の妖怪の回収も可能な限りしておく」
『すまんのう。よろしく頼む』
通信が切れると軀は部屋の隅で寝ていた飛影に声をかける。
「聞いていただろ？お呼び出しだ。さっさと支度して人間界にいけよ」
寝台に座っていた軀は立ち上がり、サイドテーブルにあった書類を見ながら再び通信機で連絡をし次々と指示を出す。こういった姿はやはり元国王だなと思いながら飛影も重い腰をあげ身支度を始める。とはいっても、そんなに準備するものもないのだが……
「行ってくる」
「あぁ」

ぼそっと言った飛影の言葉に軀が返事をする。スタスタと歩いていった飛影だが扉の前で立ち止まる。
「飛影？」
軀が声をかけると飛影は振り向いた。
「××××××××××」
それを聞いた軀は思わず笑って返事をした。

＊

「目が覚めましたか？」
視界に見慣れた男の姿が見えた。
「ここは？」
「幽助の家です。桑原くん達は幽助を連れて車で避難していたんですが、打上げの買出しをして

から戻るそうです」
「相変わらずめでたい連中だ」
「飛影も霊魂体から戻ったばかりでしょう？もう少し大人しくしていてくださいね」
そう言うと立ち上がろうとしていた飛影を無理やり座らせた。
「やはり魂が抜けた時だけ発動する類いの結界だったのか……」
「何の話だ？」
「これ」
そういうと蔵馬は包帯で巻いてある右手を見せた。
「あなたに頼まれた体を運ぼうとしたら結界が発動しましてね。大火傷です。植物を使って運ぼうともしましたが、わずかな妖気にも反応するみたいで……。これだけの結界なら異次元砲が皿屋敷市に撃たれても大丈夫だろうと見込んで時間もなかったので先に逃げました。謝っておきます」
笑顔でそう話す蔵馬を飛影は複雑な表情で見ていた。
「軀ですか？」
「知らん」
「かなりの結界でしたよ。触媒無しであのレベルの術はそうそう見かけません。術式を教えて欲しいくらいです」

少しおどけた風に言う蔵馬に飛影は舌打ちをし目をそらした。
「飛影、オレはあなたがあの場に残ると言いだした時、とてもあなたらしいなと思いました」
「あんなところで幽助に死なれても困る。それだけだ」
「えぇ、もしもの時は助けるつもりだったんですよね。自分の身の安全よりやりたい事をする。そして魔界にいるあの人もそう考えた。だからこんな結界をかけたのでは？」
「何が言いたい？」
睨むように飛影は蔵馬のことを見た。
「飛影、あなたは……」
「いよおぉぉぉ、帰ったぞー!!」
蔵馬の声を遮るように玄関の方から大声が響く。
「どうやら帰ってきたみたいですね」
「フンっ、騒がしくなる前に帰る」
「そうですか。気をつけて」
窓を開けベランダに出た飛影の姿はあっという間に見えなくなっていった。
「帰る……か。そんな場所があなたにもできたんですね」
夜の闇に溶けていった飛影を見ながら蔵馬は呟やいた。

＊

百足に戻った飛影はまっさきに一番奥にある軀の部屋へ向かった。百足内は霊界テロの影響なのかまだ走り回っている者もいたが、時期に静まるだろう。大きな扉をノックもせずに部屋へと入る。

「おい、オレにいつ術をかけた？」

「人間界から戻ってくるなりそれか？」

寝床で横になっていた軀はめんどくさそうに起き上がる。

「あの術は数百年ぶりだったんだが、うまく発動して良かったぜ。人間界に残した体に何かあったら大変だろ？」

ニヤリと自慢げに笑う軀に飛影はすっかり部屋に入ってきた時の勢いをなくしてしまっていた。

「敵意がある奴にだけ発動するようにしとけ。お前なら出来るだろ？」

「めんどくせぇ」

「じゃあ結界なんぞかけるな」

「そんなこと言うなよ。オレがせっかく……」

ブツブツとひとり愚痴る声がした。

「おい」

「なんだよ、まだ文句か？」
「約束どおり手合わせをしろ」
一瞬きょとんとした顔をする軀だったが、すぐニッと笑う。
「いいぜ、約束だからな」

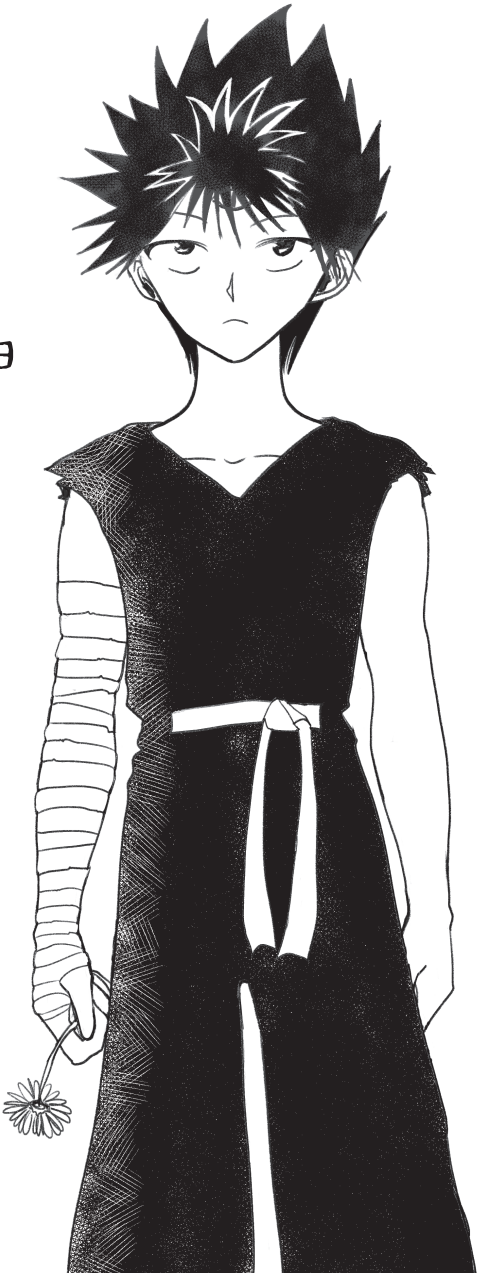
――これが終わったら手合わせをしろ。

人間界に行く直前に言った飛影の言葉を思い出し、軀は小さくため息をつく。

「もう少し素直に言えばいいのにな……」
「何かいったか？」
「なんでもねーよ」

そんなやりとりをしながら二人は闘技場へ向かうのだった。

第2話　理由



お前はいつまでオレのそばにいる？

「軀、手合わせをしろ」

「めんどくさいからまた今度な」

人の部屋に勝手に入ってきたかと思ったら、いの一番にこれだ。

飛影はパトロールが少しでも暇になるとすぐ手合わせをしろと言ってくる。毎回毎回ボコボコにされるのに何が楽しいんだか……

少し前より戦いが苦痛ではなくなってきたが、オレは幽助や飛影、雷禅の旧友らのように戦闘を楽しむということが苦手だ。

ストレスの発散の場なのに楽しむとはなんなのか？

ただ、飛影との手合わせに関して言えば、誰にも邪魔されないふたりの時間を作ることが出来るので楽しみでもあった。

が、最近は少しイライラする事も増えてきた。

――こいつは戦えれば誰でもいいんじゃないか？

元三竦みという名目がある自分だからコイツはオレの側にいるだけで、そのうちいなくなる。

そう思うとイライラする自分がいた。

飛影なんてただのガキじゃないか。

たしかに氷泪石には感謝してる。あれが無かったら、オレはまだやさぐれたままだったし、飛影を自分の配下にしようなんて事も考えなかった。

それならオレは飛影じゃなくて氷泪石さえあればいいのか？

分からない分からない分からない。

「おい、軀」

再び声をかけられた時はふて寝モードを決め込んで無視してやった。

しばらくして飛影が部屋から出て行く。

――ほら、戦わないと分かれば去っていくんだ。

鬱々とした自分の思考が嫌になり、ため息が出る。

「ガキなのはどっちだ……」

シャワーでも浴びて気分を変えようと寝台から起き上がる。ふと、寝台横のサイドテーブルにあるモノに気づく。

黄色い花びらの花が一輪。

さっきまでこんなものは無かった。
ということは、持ってきた犯人は……
「くっくっ、仕方がない奴だなぁ。メンドクセーけど、手合わせしてやるか」
水を入れたグラスに黄色い花をいれ部屋を出る。

お前がいつまでオレのそばにいるかは分からない。
強さと戦いを求めるならそれでもいい。
どんな理由であれ、お前がオレを求めてくれるならそれで充分だ。

だから、オレのそばにいて欲しい。

*

最近の軀は機嫌が悪い。

少し前はニヤリと笑いながら手合わせもしてくれていたが、最近は全て断られている。
――オレが弱いのがいけないんだろうか？
元三竦み。
本気を出したらたぶん一瞬でミンチにされる実力差がいまだにある。
千年以上生きてきたアイツにしてみたら、オレは赤子同然なんだろう。どうやっても変える事が出来ない事実。
それでも出来る限りアイツの近くに居たいと思ってしまうのは何故なのか。
人間界にいる奴らがニヤニヤしながらアレやコレを聞いてきたことを思い出し、思わず舌打ちをする。
『飛影にとって軀は本当に大事な存在なんですね』
大事である事は否定しない。でもニヤニヤ笑われながら言われるのがとても不快だった。人の気も知らずに勝手な事をいう連中だ。
軀の過去は自分だけが知っている。その事実は自分が特別扱いされているという証拠でもあり、側にいていい理由だとも思っていた。でも軀からしてみたら違うのかもしれない。
単なる気まぐれ。
長い長い時間を生きてきたアイツの暇つぶしだったのかもしれない。

続きは本編でお楽しみください